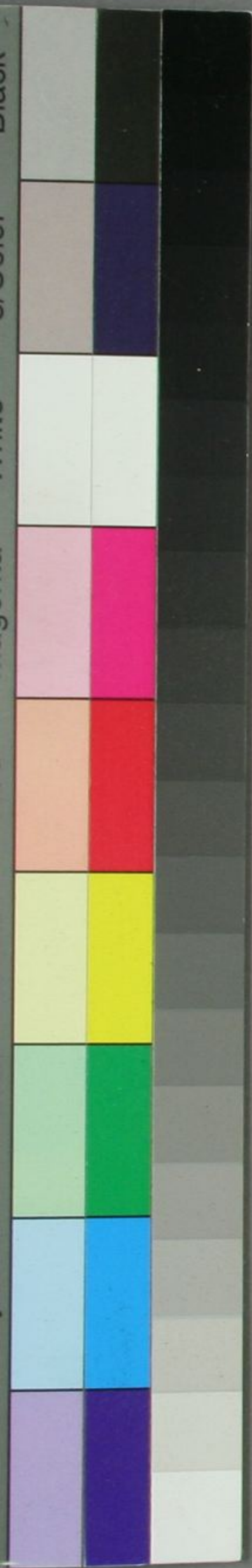
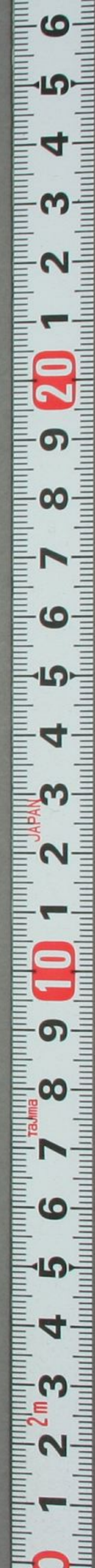


林氏雜纂

上

2
1593
1



多氣志樓主人著

林氏雜纂

全三冊

東京

甘泉堂
千鍾房
合刻

官許

林氏雜纂叙

陸前國林子平先天少後憲有外
患著海國兵談當時海晏河靖
朝野恬熙不以外患為意賢閣老
以白河少將猶以為妄言証世者况
使吏庸人聞其說未有不掩鼻而却

門
號 15-93
卷 1

林氏雜纂序

走者子平沒未幾有鄂羅斯之
愛其所言此龜卜數計天下始非
臣識見之明豈可不謂豪傑之
士哉東京松浦子重夙業其為
人厚其遺言遂行成二卷名曰林
氏雜纂邦寄徵軍序夫兵法之要

在於知己知彼惟知己而不知彼則身
目圍於一隅懵昧固陋胡足以言之天下
之大計子平有見於此北極帳夷西
耳針長崎以詳悉海外之情狀為
先務然在子平之時諸港尚鎖故
其論以防戰為主今則子平以為可

實可憂者莫如暹羅巴諸國 我其
之通和親睦條約仿造其器械則
有銃礮有鐵道有火輪船有傳信
檄講究其學則有開成學延洋師
遣留學生設外之事情日明而天
之目日開彼使乎平而有知視以

寫河如夫和之破必歸戰之極
必歸和之之其戰未始不相由也
國之才可戰而後和之久而不渝
則名和而實屬隸其勢必至於陵
侮之符制之役削攘奪之而和
亦遂不可得也然則兵備之不可

張惡有和與戰之別哉嗟予予當
天少身目未開之際猶能先衆禱無
備卒然可觀則俾其出於今日耶吾
必知周流天下歷於各國戎政之
得失通而處通之泰互而酌量
之為

皇國之萬世適宜之法其揣摩
精確更有不待於兵談者焉而墓
木既拱矣無由起之九原逞其伎倆
余竊為天下痛惜也余承乏登萊知
縣系於陸前國之先哲有子平其
人表章其事迹以獎厲後進因吾

職也而兵亂之餘仍以紙履躬務
鞅掌未暇及幸有子重是蒙故不
辭以多事援筆致卷首云

明治庚午仲秋就鸞津宣光撰前書于

登米縣安遇齋

神井耳
命苗裔

縣連
宣光

庚戌
全尔

松浦子重為政術敏
吏悉認家甘地亦大
丁著化之積玉之有
德借心於此業益三
十年矣考邁

王政之新之運者惟
夷闕振之舉則子生
三九年之人心大為
為國家之用人皆成
子重之篤志且海見

之身存之在自幼年
子年之為人後之善
訪其忠之族之揚其
赤親善故信之平之
讀其書林氏發其意

松氏系集序

有完之以謂慷慨者老之
士惟於少若山子亦而如
子重自極強海客依
之地以爲國象有困之
業其深而平可謀其子

平同之志真身之子亦之
志也也今自之子重回其
志也而浩而平之知也也
平也之志也也也也也也
益多之志也也也也也也

西法三之歲庚午菊
秋山中賦撰再書於
東海之終天行寓



東久世開拓長官詠

省遊之秋昔瑞ぬまき
ゆゑに東あはれくゝん
くちまきしあけ靴
君もろや 通禱

東入世開公長官稿

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

贈巨理往齋集書翰之寫

親也為書翰之寫
為板本有金
其也子たくも為
井子學

河之揚波二百年無人
 舟口到防邊一德熱
 血忠埋地唯五九系
 一難老泉 水今防海

快狗 至竟橋果學有
 神果后知我功呀一
 重孫只言繡新人

竹溪齋題



海玉岳波のうきも
 舟のうきもよせは
 先のうき
 さみしき
 世のうきも
 林道良阿
 雜書

漫遊中所齋雅帖所有寫

子 氏 林 先生 肖像

北海道
八家



探齋氏一縮寫

林氏雜纂序

林良伍来翰

前文 先生之在疾、以境、お來りか、之知、
 以約、来りる、寫、を、上、是、ハ、長、治、正、助、家、に、
 有、像、之、心、也、ハ、子、平、の、怪、言、子、平、よ、く、似、之、人、
 と、中、年、迄、在、る、十、七、才、を、却、床、事、へ、始、終、
 有、之、と、依、て、ま、ん、ま、ん、と、有、る、を、な、る、亦、原、
 何、某、と、中、老、醫、八、十、五、條、を、其、容、息、と、知、と、少、
 持、り、又、之、一、知、少、一、類、應、と、り、と、云、一、お、此、圖、ハ、少、
 肉、と、加、ハ、寫、一、中、ハ、下 畧、
 良伍

雲津様



林氏雜纂卷之上

松浦武四郎 編

海國兵談の後

傳へては我日本此はをもの法能きけりる序の後

父兄訓此好ふ

鬼神を和とまてハ心志と親子此是れ志とりのハ多れ

學子則

一孝悌忠信勇義廉恥ハ字能心よ記と一

孝ハ親り侍る道なり

親に對して不殺不作法此之業を不殺不作法此の業
 多く其身此行作直にして親の心を安堵する事なり
 一情は兄弟の義を盡す道にして且長者の順ふ事なり
 兄は己を不及己より年長増る人故に兄を敬て能く不
 成云順と行位坐臥飲食亦も禮讓を不忘して順
 道を守り事之又年減する人と弟同儀を事なり
 一忠は君に侍る事にして且朋友小交る不偽多く信義を
 以て事なり
 己を盡すは忠といふ君に事して死するも己を盡すは
 朋友小交あるも己を盡すはなり故に士は己を知りて

為小死してなり故に忠なり

一信は毎事に君を忠く事する事なり
 上天子より下庶人まで信あり人服して多ければ人
 肖く貴賤を多く信あり人服して多ければ人
 一勇は義に相争つて勝る事なり
 文武は諸難を心術心法も勝るにあつてこれの上達成就
 遅きに勝るは万能の上事なりと知るべし
 一義は勇に相争つて裁断し心なり
 道理不仁を多く決断して形骸を去る事と云ふ死を死
 場とて死して討つ事場とて討事なり

一 塵ハカク有之ハシハカク立派なる事

毎物にさたく奇異ふ心とむさく好美心之捨つて我見て
そく取やうとたを不取之恥におおなり

一 耻の辱を知りて前勝の致する事たる

毎事より無未練する而業成法して人笑われき
穢りく眩病する而業あやして他日さけられらる事
心成法く拙業の塵におお

右八徳ハ人孔土産なり

一 讀書怠る事なれ

讀書ハ萬能ハ基なり

卯の時起て高聲りも讀書す也

辰の時より巳の時まで一字を習ふ

晝の間ハ下小記とて武蔵を習ふ

又農工商ハ卯の時より其指前此業致致を

他の遊樂と習ふ事と林を

夜ハ法軍讀及ハ法記録亦年終隨ハ或ハ三五枚

十枚或十枚乃至百枚も讀つ事

一 武蔵の精出を

巳の時より酉の時とて武蔵を習ふ

就中刀搦弓馬

先とて併學問七條武蔵十の條の心算る

一 良智徳徳記して心算を廣く

人々善惡邪正の附く可否如何と顧れは善は善と惡は惡と
 明子辯之知心あるは是良智之此良智ハ不學して大然
 百人の胸中に存在する者ありて所謂神明之萬事此
 良智に向て取計一此良智れまにまをるる克己復
 礼此修行之強て勤一克己ハ勇之顔子は是或仕
 終せらるる其次ハ是と勤む一
 一克己復礼此二言能辯ハ勤む一
 克己ハ己上勝之之業之己ハ人慾此私をく手取勝れ
 こと皆己より此己成抑除る克己然也
 復礼ハ慾に勝て道と義に叶ふ極まると事之事物皆

礼不礼有て顧一或ハ妄ノ怒業復る時と何故ハ斯
 怒業復る也と顧ハえより私此我儘より起る復るれば
 一度顧て息消散せらるる最氣等の業大ニ勇と用と前
 一業此湯糝業此之は當朝此大礼之然るは隱者乃顧ハ
 事教伐の音るは福一之圖不心持ハ大ニ免悟といふ事
 附聞能此時持文或ハ琴棋畫此不此難應る習し
 空一と口と送ること多し
 右ハ徳讀書武藝良智克己復礼業の湯糝業ハ條
 ハ皆身道業也今日此業ハ係るは遠大の業に
 あらざる業子是故勤るに禹ハ寸陰と惜る云り寸陰は

一寸此隙と云事之又古人業を勤むる君子は外一隙に
 起ると云ハ一月の教二十日ハ學ハ是ハ故一月以
 四十五日ハ是ハ刻舎之是勇此持前之聖人の心法ハ佛
 氏ハ神家の武藝者の事位ハ勇にありは是ハ行の邊
 此ぬ之若て心法ハ勇積布と進む事此也君子勤む
 文武之二業ハ皆此心法と字と云之是學事の大趣也

附録三章

- 一物と欲ハ志と失ふ
- 己の志ハ紀好む事の一途ハ是ハ流極ハ必也
- 一金教の經濟ハ人ハ能く知事

大小此福ハ徳一々家道此約ハ他の方ハ不徳一
 朝言と事ハ蓄積と云也

一飲食男女ハ人の大慾也不可不慎也

此今と婦女ハ大丈夫ハ度と失く身ハ損ハ是ハ
 義理ハ欠恥辱を取不和を生ハ是ハ終ハ國家
 破壊ハ是ハ人ハ能く謹懐也

右

教訓いろは歌

いとける人多くもよくゆく事ハ是ハ教訓五川の常此道志ハ是と
 る事ハ是と事ハ是と事ハ是と事ハ是と事ハ是と事ハ是と事ハ是と

はふんまゝの志願ふ長く願ふまゝにゆくは武此書は位乃本
 にんにおおのり牙此上はくもきよきれう阿一に事物に
 けのく乃礼義とるれ朝夕に心やまうと語る中のみ
 つまらざる人故うやまふ節も多し已成にたすは石礼
 ぶあまに人のあまきくしつりりしれ語るれにけう結福
 ち母乃母は須山初阿は海まき海まのかまておけれ
 利此く義はいされ海は取のそて理の自然と明くせよ
 ぬきんて我志るる不にまのてれ人れ智まうまようあり
 るん義を多れきせのゆを好まよ何ら降ぬ者持たは
 とのれまくしは友まされよ人乃何れあわのあ一に終り

せりれ果は口論は毎事り教れにてもけやまをよれ
 かりには五つのふれまうのし能く記まうてて教まうのよ
 とも書いまる一に能く其次にカクし移まら馬と一終
 ちるあよる一八身妙にのれこい負まうまの事八何れ
 れい美そその神に此を別ありまぬに礼るははい志也
 ろたうのし能く其牙にまされの教や祖父の教はくは
 つとをあまに胸のまうまに極まゆりおり下まのし
 ねん力は定まると通まのりり言まきゆらむ心たはれ
 たりあまのしつりまの精出せ月只るれまよまうと一
 らくお好くと書れ書いまぬ人君は石也親の名考と

ひとくち腹れま付のりよま理のねうみ短く直りゆのり
 うつりまふらんこれ太まよくたはれぬらん中ぬりま
 るまふらんまふや太おのりまふとまふり秋まふ作はま
 のちまふまふまふあまふまふり改免まふれまふりま
 たりまふり也の孫まふりまふりまふりまふりまふり
 まふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 やまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 まふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 けまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 されまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり

う後まふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 じんまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 まふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 あまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 何のまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 めまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 みまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 しよまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 及まふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり
 ひまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり

もろくは此のよまきと口は本の記録くんとん終るんは
せひ張よく赤くくくくくくく切取れたる人く拙る
すきよのく海くくくくくくくくくくくくくくくくく
右様くくくくくくくくくくくくくくくくく

和蘭船ノ圖ノ上ニ刻スル文

阿蘭陀一名ハ和蘭又紅毛ト稱ス則業謁埤爾蘭德亞
ノ中ノ一州之ソレ。子エテルラシデヤハ世界ノ西北邊歐羅巴分
野ノ國之其地七州十七都會アリ。ワランダモ其中ノ一州之本邦
モ惣名ハ日本ニテ其中ニ四國九州杯ト分ルカ如シ。ワランダ北極
ノ出地五十度ヨリ五十三度ニ至ル甚寒地之其人物ニ五ツノ異

相アリ長鼻緑眼紅毛白色長高也文字ヲ。レツテルト云其
筆法横ニ書ス日本唐山等ノ人ニ不讀。其服ハ。ブルツクトテ日
本ノ股引ノ如キ物ヲ着シ夜ハ。ロツコトテ襦半ノ如キ物ヲ服ス
官アル者ハ。マントルトテ丸合羽ノ如キ物ヲ礼服トス其食物ハ。
フロードトテ小麦粉ヲ餅ニ造テ炙食フ世ニ。ハント云モノ是之
其外鳥獸膏粱ノ物ヲ好。又生蘿蔔ヲ多食ス其國日本ヲ去
一日本道一萬三千里之其中日本ヨリ吼哇へ三千里吼哇
ヨリ。ワランダへ一萬三千里之扱毎年日本エ来ル。ワランダ人ハ
本國ヨリ来ルニハ非ス皆吼哇ヨリ来レリ吼哇ハ。ワランダヨリ
押領シタル國ニテ出張ノ城アル所ヲ。バターヒヤト云日本ノ紅毛

館ヲ出島ト云カ如シ吼哇ハ日本ノ正南ニ當レリ此故ニ五月
入^ツ嶺ノ節南風ヲ得テ日本へ來船シ九月北風ヲ待テ飯帆ス
是ヲ定式トス扱ヲランタ人船ヲ呼テ。シキツフト云其船ノ制
甚壯大ニマツ大材ヲ用テ船ノ骨組ヲ作り粟ノ角材ヲ以テ
縦横ニ打合セ空隙ノ処ハ漆或ハ。千ヤシヲ込又外面水ニ入処
ハ悉ク鉛ヲ以テ包ム船ノ大サ横三丈余長十五丈深サ三丈
八尺船ノ内ハ惣三階ニ階毎ニ九尺帆柱都テ四本アリ中央
ノ大柱高キ一十九丈ニ都テ帆ノ數十七幟ノ數十二四面ニ
大砲三十余ロヲ設ク炮毎ニ三貫目ノ玉ヲ入ベシ扱其船ニ
乘來ル人凡百余人ニ其中甲比丹^{カヒタン}ヘトル。シケツフル。フヲ

フマン。ステユルマン。等ト云ハ役名ニテ上役ノヲランダ人ニ其
余ノ下人ヲ。マタロスト云甚賤キ風俗ニ又下人ノ中一種。ス
ワトルヨシコト云モノアリ世ニ黒ホウト云モノ是ニ是ハ本
國ノ人ニハ非ズ。ジヤガタフ。ブウキス。ボウトシ。テ一モル等
云南海ノ島ニノ下人ヲ。ヲランダ人買取テ名々ノ使ヒ者ト
スルニ皆熱國ナル故其人甚黒色ニ又船毎ニ名アリ或ハ。
ゼートイン或ハスタアベニス或ハホイストスヘーキ等ト云ニ
日本ニテ何丸ト名ツクルカ如シ扱其船ニ載來ルモノ砂糖
蘇木^{スハク}藤羅紗^{トウラ}天^{テン}我^ガ織^シ奧^{オク}鳴^ネ海^{カイ}氣^キ類木香阿仙藥丁子
山飯來胡椒又硝子器日鏡其外珍器奇鳥獸ニ又其食

料ニ牛豕雞鶩ノ類各數百千ヲ載ス亦日本ヨリ積取ル物銅
百万斤ヲ定式トシテ其外傘磁器漆器銅罐銅錢小間物類
織物類又食物ニ境酒芥子粕漬ノ大根諸菓ノ漬物又
各數百千ヲ積之其船凡千万斤ヲ受其國開闢ヨリ今年
迄五千四百二年ニナル阿蘭陀ト云号ヲ立レ國主ヨリ今年迄
千七百七十六年ノ國主紘脉變革ナレ寛永十七年商賣
免許アリレヨリ今年迄百四十三年綿ニ不絶緝也天明
二年記

此圖崎陽ニ一見一聞ノマ、ヲ其地ニテ刻セシモノカ傍ニ
仙台林子平戲述書長崎富嶋傳吉梓刻ノ篆字朱

印有ルナリ

跋六無山人著書後

鎖國之計似美。而其弊終至自鎖。我人鎖我學。又
併我才與知而鎖之。是可歎已。試把百年前說海
外事情者觀之。不涉於荒唐。則必失於乖繆。特達
若林子平。猶且不免其陋也。然子平居河清海安
之日。豫虞險波毒浪於身後。喋喋辨說。著書萬言。
至使開明今日之憂國者。不得不推尊其卓見曠
識。所謂隻眼如箕者。非耶。兒貞留學于法蘭西。今
茲夏五。寄彼國新刊書數部於其友川勝大海。內

有王代一覽三國通覽圖說二書顧彼學士羅尼輩所譯也嗚呼彼亦知所原哉庚午仲秋鮑庵逸民粟本鯤識

坪碑考

坪或作壺俗作壺者誤也○坪蒲明切音平地平處○壺苦本切音悃宮中街亦爾雅宮中街郭璞曰街閣間道也亦詩大雅其類維何室家之壺○此碑也在陸奧州宮城郡多賀城址陸奧國宮城郡風土記云坪碑在鴻之池為故鎮守府門碑惠美

朝猶立之見雲真人清書也記異域本邦之行程令旅人不為迷途也

○此碑作坪碑亦作壺碑共是可謂道路之碑之義也雖然稱壺碑者不知始于何人也唯因風土記為坪碑者可為是也而因為鎮府門碑之文則建于碑於城門外面大道令人知四方之行程者也

○此碑記五方之行程謂去蝦夷國界一百廿里也右謂一百廿里者准于今法廿里六尺為步六十步

丁為一里今乃以三十六丁為一里也故謂古之一百廿里者乃准于今之廿里也則知挑生郡以北盡没于夷地也其挑生郡者在陸奧州中央

以南之地也考之國史往昔夷人侵凌陸奧北邊而
動乃入寇奧南野總之諸州也故東征之役無已者
千有餘年矣而桓武帝延曆中征東將軍坂上大宿
禰田村磨驅夷人而悉收陸奧開地者九百里自挑生郡
至于南部大間濱其行程乃今法之一百七十余里乃古之九百里也因海為塞則陸
奧無征戍之事者六百余年也可謂實是征東將軍
之大功也其後

後花園帝嘉吉三年武田太郎源信廣越海而入于
松前遂得地者七百里自大間濱隔一條汐水而以
南界東北行今法之一百里計乃古之六百里也是乃今之蝦夷國界也自是子孫世世

據守其地迄于今也松前地方雖絕海乎猶隸陸奧
也因是觀之方今宮城郡鎮府古城者去蝦夷國界
為一千六百廿里也田村磨之所開九百里源信廣
廿里則為一千六百廿里也今世讀碑者因其碑文而不知有蝦
夷國界之道法古今近遠之差也故此記爾觀者詳
焉仙臺林子平述

攷坪碑在陸奧州之多賀城相傳惠美朝獨立之
迄今年已千計揆立碑之意不過使四方行程者
適所從來余本華人安能詳述今仙臺林子持碑
見示觀其筆法適勁專倣古人而若論其精粗則

林氏雜纂卷之十一
吾豈敢雖然絕海東方唯見有此書耳且至於道
里之遠近山川之志異恐非余所能參稽者是為
跋

大清乾隆四十三年歲次戊戌重陽後三日書於
崎陽客館吳超後學程赤城

林氏雜纂卷之上

